

氏名	たけ　　うち　　よう 竹　　内　　洋
学位(専攻分野)	博　士　(教　育　学)
学位記番号	論　教　博　第　55　号
学位授与の日付	平　成　7　年　3　月　23　日
学位授与の要件	学　位　規　則　第　4　条　第　2　項　該　当
学位論文題目	日　本　の　メ　リ　ト　ク　ラ　シー —構造と心性—

(主　査)
論文調査委員　教授 柴野昌山　教授 上杉孝實　教授 江原武一

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、日本社会の受験生やホワイトカラー・サラリーマンにみられる、欧米と較べて特異な「マス競争状況」を「日本型メリトクラシー」と定義づけ、このような「マス競争」へのアスピレーションが、どのようにして発生し、存続しているのか、また、このような日本型選抜システムが、どのような人間像を生み出しているのかを理論的、実証的に明らかにしようとしたものである。

第1部では、従来の学歴移動ないしメリトクラシー研究に関する伝統的アプローチとして、機能理論、葛藤理論および解釈理論の三つが批判的に紹介される。すなわち、まず、機能理論は、学校教育によって付与される技能・能力が上昇移動の誘因となり、これが社会の技術変化に対応しているという業績本位の地位達成モデルを基準とするメリトクラシー論であるが、これに対して1960年代以後に出てきた訓練可能性論などのスクリーニング理論は、学校で得られる教育資格や卒業証書は技能の証拠ではなく潜在能力の指標にしかすぎないという見解に立って技術的機能主義の修正を迫った。つぎに、マックス・ウェーバーの身分文化的学歴理論に依拠する葛藤理論は、支配集団による地位独占と正当化に注目する一方で産業社会と学校教育との対応関係のなかに階級文化の再生産メカニズムを発見し、支配と被支配の観点から機能的アプローチに対抗した。さらに解釈理論は、これまでブラック・ボックスとされてきた学校の内部過程に注目し、教師、生徒関係、教師のカテゴリー運用などが知識の配分・統制を通じて文化的再生産に寄与する解釈的観点の意義を訴えたというのである。だが筆者は、これらに共通する視角が、社会における選抜・配分の問題を教育システムに封じ込める教育システム還元論であるとして再検討を求めている。

第2部は第1部で構築した分析視角にもとづき、日本の受験競争、新規大卒労働市場、大卒ホワイトカラーの昇進について、業者テスト資料、高校別大学進学データ、企業の採用資料、人事資料などインサイド・データを収集し、それをもとに選抜システムの経験的分析を行っている。同時に、中学生質問紙調査、高校生質問紙調査、ホワイトカラー質問紙調査などによって選抜システム構造に対応する心性を明らかに

することを試みている。とくに、「受験と選抜」に関しては、日本社会における学歴の社会経済的地位達成機能はアメリカやイギリスに較べてむしろ小さく、また同じ日本社会でも学歴の社会経済的地位達成機能は長期趨勢的に大きく低落しているにもかかわらず、なにゆえ受験競争が激しいのかという問いから出発し、その説明を選抜システムの社会的構成という視角から考察している。すなわち、日本の受験はエリートとノン・エリートの分断的選抜ではなく、細やかな学校序列にみられるように、ノン・エリートにも選抜（差異）のまなざしをそそぐ傾斜的選抜システムである。したがって、日本の受験戦争は学歴社会という外部構造によるよりも、こうした傾斜的選抜システムそのもの（受験社会の自己準拠化）によって過熱させられ、層別競争移動（stratified contest mobility）型になり、再加熱が構造化され、アスピレーションが煽られるという。また、「内部労働と選抜」では、入社後の大卒ホワイトカラーの選抜システムの仕組みが課長になるかならないかというような分断的選抜ではなくて、一年あるいは半年早く課長になるというような傾斜的選抜という点で、またトーナメント移動というより、リターンマッチが組み込まれた層別競争移動という点で受験競争と驚くほど相同構造であることを指摘している。

論文審査の結果の要旨

本論文の独自性は、従来の競争・選抜に関する教育システム還元論を批判して、教育システムにおける継続的な選抜じたいが、アスピレーションの加熱と冷却をもたらす装置として作用する点に注目し、伝統的アプローチの死角を埋めるメリトクラシーの分析視角として、トーナメント移動の増幅効果論や能力の社会的構成論などによって、新たな「選抜システム論」を提示したことにある。この新しい視角にたつ理論は、なぜメリトクラティックな選抜が行われるかについての解明を意図するよりも、いかなる選抜がどのように行われているのかというメカニズムを社会の選抜システムそのものの中に求めようとするものである。即ち、主として、J. ローゼンバウムのアメリカにおける高校および企業の選抜システム研究をとり上げ、事実としての地位移動が実は競争移動ではなく、トーナメント移動であることをふまえて、初期のアチーブメントや昇進が後の業績達成や地位達成に有利に作用し、勝敗を増幅する効果をもつこと、また最初の勝利は能力があるというシグナルとして機能するという見解を理論構成の有力な根拠にした。またトーナメント移動という選抜・移動システムじたいが人々の能力を定義づけるという能力の社会的構成論やメリトクラシーのもつディレンマを克服するための社会的装置として、加熱（Warm-up）と冷却（Cool-out）、失敗の正当化とチャレンジへの再加熱というメカニズムに注目する視角を用意することによって日本の選抜構造を分析する枠組みをつくり上げた。これが、まず第一に評価しうる点である。

第二に、欧米との比較において、日本的メリトクラシーの現実に迫るための方法論を開拓するだけに止まらず、そのような日本の競争や選抜が生起するメカニズムを解明するために、トーナメント移動というよりもリターン・マッチが組み込まれた「層別競争移動」システムを新たな分析枠組として提示したことは妥当かつ説得的であり、本研究を独創的なものにしていく。

第三に、本論文は、理論構築と経験分析を切り離すことなく、相互に緊密に結びつけることによって展開した意欲的な教育社会学的研究であり、学業達成、地位達成、さらには、ホワイトカラーの昇進までを貫徹する日本型競争の特徴を的確に描き出すことに成功した。ただし、層別競争移動システムとしての日

本型メリトクラシーが、目的と欲望をむしろ解体してしまうそれなりの頑張り人間をつくり出し、そのことによって受験・選抜社会が造形する競争適応型人間が再生産されているという日本型競争社会の人間像に関しては、説明が十分であるとはいえず、その分析に精彩を欠くきらいもあるが、本論文全体としては理論的、経験的整合性をもち、明確な視点による論理展開は高く評価されてよい。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成7年1月11日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。